哲學研究　第五拾九號

意志の本質

大脇義一

最近にその永眠を報せられたヴント教授が心理學に對して爲した貢献、言ひ換へれば彼が「心理學の父」と呼ばるゝ所以は種々あるであらうが、就中、彼が自分と同時代若くは先輩の生理學者や物理學者が個々の方面に斷片的に研究した結果を集大成して自家藥籠中のものとし動かすべからざる科學的心理學の基礎を築き上げた點にあると思はれる。一面に於て生理學的、物理學的研究を心理學的見地より見て、是を改造すると共に他面、古來の獨斷的哲學說に對しても徹底的の批判を加へて確固たる科學的心理學の體系を形造つた點にある。確固たる心理學の體系とは何であるか、そは言ふ迄もなく統覺心理學であり、心理學上の主意主義である。

從來の心理學の一般的方向は主知主義であつた。哲學的心理學は勿論のこと、經驗的心理學でさへ、能力心理學聯合心理學然らずんば表象心理學であつて、何れにするも主知的方向を出でなかつた。此の主知的方向を打破して主意的方向こそは新

心理學の採るべき道なることを明示したのがヴント教授その人である。心理學の科學としての獨立は主意主義、心理學的主意主義の標榜の下に爲されたのであり、新心理學的の樹立は主知主義を排することに依て完成したのである。ヴントが心理學をしてあらゆる精神科學の基礎づけたらしめむとした抱負は暫く措いて苟くも心理學が具體的の精神現象を記載し說明し其の法則を發見せんとするものなる以上は現在も將た將來も主意的方向を採り又採るべきであると思ふ。

然し乍ら主意的心理學卽ち統覺心理學に對しては隨分多くの非難がある、中でも代表的なるものはキュルペの主張である。(一)

キュルペの言ふ所によると、主意主義は衝動を以て精神現象の根本的機能となして居る、下等なる有機體に於ても又、兒童に於ても一番最初に完成するのは意志作用であつて、其から後に、他の種々の知的作用が發達するのであると考へるが然し其は誤謬である。進化發展の第一段階は未だ全く分化せざる全體といふものがあつて其の中から種々の要素が分化して出來てくるのであつて、吾々成人の發達した精神生活に於て始めて區別せられ得る特殊の現象(意志)からして他の特殊の現象が派生して來ると考へられない。此の點で主意的心理學が意志作用から精神現象を導き

出さうとするのは明かに謬見であると。

然しキュルペの此の非難は主意主義の意味を誤解せるものである。簡單なる感覺又は表象に伴ふ衝動運動は原生動物や蛆などに於ても最も早く現はれるものである、所が此の衝動なるものは表象と意志との共同の出發點であつて、その中には意志の要素と同時に無論表象の要素をも含んでゐることに注意せねばならぬ。主意主義の意味する所は精神現象の原始的統一が意志的であるといふにあつて、決して表象感覺を以て意志に還元し、意志より一切の心的過程を派生してショペンハウエルの哲學に於けるが如く意志を以て根元的の存在となすものではない。

キュルペの第二の非難は主意主義によれば發達したる精神生活に於ても第一次的決定的の因子は意志である、意志は吾々の注意を支配し雜多の刺激に就いて選擇をなし表象の經過もその方向も全く意志に依て決定せられるとする。がこゝに所謂意志なるものは原始生物に見るやうな單純な衝動ではなく、盲目的な壓迫でもなく深い熟考に基いた動機に支配せられたものである。して見ると又かうも言ひ得る譯である、吾々の精神生活の決定的なるものは意志自身ではなくして更に其の意志を支配して居る所の動機である。だから動機が最も決定的な因子であると言はね

ばならないではないかと。

なる程、さうも言ひ得るであらう。然し元來動機の無い意志といふものは吾々の決して經驗する事のない抽象的虛名である。動機を外にして意志を考へることは出來ない、と共に意志を外にして動機を考へることも出來ない。意志と動機とは概念としては明かに別の物であるが心的過程としては同一物である。だからして動機と意志との何れが第一次的のものであるかを爭ふのは全く無意味である。意志の第一次的なることはやがて動機の第一次的なることを意味する。動機が決定的因子なりとは意志が決定的因子なるの謂である。さうであるから、此の非難は主意主義には當らない。

最後に猶一つの非難がある。キュルペの考ふる所に從ふと、抑々表象といふものはどうしても獨立的のものではなくて從屬的のものと思はれるからして、吾々の精神生活が實際上統一的結合を形成して居るといふことを表象に依て說明するのは困難である。感情も亦さうである。だから殘る所は唯だ意志あるのみである。意志が性質上不變であるといふことが此の役目を果すのに最も適して居る。かう云ふ譯から主意主義が主張せられたのであらう。所が此の性質上不變の意志と云ふが

如きものは事實に適合せざる抽象であつて心理學としては、採用すべからざる概念である。のみならず、吾々の精神生活の統一とか人格の統一とかは單純な經驗的事實ではなくして實は反省の結果である。吾々の人格統一の假定は單純にして恒常的な心的性質に基けるものではなく寧ろ觀念聯合等による個々の精神作用の一貫した連續に基くものであり、或は精神の發達が急激なる跳躍を許さず極めて徐々たる經續をなす點に基き、或は吾々の精神生活の背景たる身體が殆ど不變であるといふ樣な想定に基けるに過ぎない、卽ち其は單純なる直接經續その儘の事實ではなく寧ろ反省の結果であると。

如何にもキュルペの云ふやうに精神生活の統一を表象に依て說明しやうとするのは困難である。表象のみに依て統一の基礎付けをなすことの出來ないのは事實である。然し表象や感情が、かゝる役割に全然與ることが出來ないと云ふならば其は誤である。主意主義の意味する意志は決して一般的恒常的の意志ではなく個々の具體的の意志である。主意主義が意志に依て意識の統一を說明せむとするその意志なるものは表象感情等の他の意識過程の結合から引放された超越した意志ではなく、心的結合その物の中に見出さるゝ意志である。意識とは心的內容の結合の直

接經驗を意味するに外ならないとすれば、意識の統一といふのは此の結合を措いて外には有り得ない。してみると少くとも意識の統一といふことは事實の反省ではなく事實その物であると言はねばならぬ。

かやうな主旨でヴントはキュルペの批難に答へてゐる。吾々は是に依て主意的心理學の眞意をかなり明かにすることが出來ると思ふ。

然らば抑々主意主義の心理學は意志を如何に考ふるであらうか、意志の本質を何處に求むべきであらうか。吾々は是に答ふるに先だつて一般に意志が心理學者の間にどんなに取扱はれて居るかを一瞥する必要がある。

異論の多い心理學の學說の中でも意志に關する議論は感情の其と相竝んで最も異說の夥しいことを以て知られて居る。今その中で最も代表的な考へ方を便宜上知的、情的及び意的の三種に分類して見やう。

先づ最も極端な知的意志論はミュンスタベルヒの其れである。彼に從へば吾々の意志と稱して居る所の意識內容は決して一種特別な機能ではなく、其は知覺表象記憶表象等の表象のある特別の系列に過ぎぬ。而て表象は本來、感覺に依て成立するものであるから、意志は感覺の特殊の系列であるとも言ひ得る。一定の質と强度と

情調とを其の屬性とする感覺があらゆる心的過程の成素であるから、意志が心的過程なる以上は又感覺の複合以外の何物でもない。かう考へてミュンスターベルヒは意志過程を感覺の複合に歸してしまつた。

ミュンスターベルヒほど極端ではないが、やはり意志の知的方面を重視したのは、モイマンである。(三) モイマンは意志の根本的性質が自己の活動の意識にあるとした。意志及び是に類する諸過程、例へば思考とか有意注意、想起乃至は有意動作に共通な最も著しい現象は自己活動の意識である。目的表象に從て繼起する過程を自ら選擇し支配すること、他人ではなく自己が親ら選擇し支配するのであるといふ強い意識を伴ふことである。意志過程の中核は實に此の選擇と支配の作用にある。能動的選擇作用の見出さるゝ所、卽ち意志の活動する所である。此くてモイマンは極めて適確に意志の特質を指示した。が惜むらくは彼も知的方面に捕へられて情的半面を殆ど看過した。

然しミュンスターベルヒの所謂表象の系列にしろ、モイマンの所謂能動的選擇作用にしろ、些細に是を檢すれば案外強い感情に導かれて居る。最も知的なりと思はるゝ內部意志動作、殊に思惟に於てすら好奇心、興味乃至は眞理の愛好ともいふべき感

情的分子を暗々に豫想して居る。かゝる感情的分子に依て始めて所謂活動の意識が其の潑溂さを失はないのである。

かゝる知的意志論とは反對に此の感情的分子を特に高調する代表者の一人はアレキサンダー、ベインである。(四) 彼は進化論を採用して是を巧みに聯合心理學の中に織り込んだことを以て知られて居る。彼は次の如く意志動作の發生を說明した。先づ有機體が自發的にある運動をする。さうすれば其の運動は快又は不快の感情を生ずる。かくしてある自動的運動と快不快の感情とが偶然に一致して其が度重なれば遂に把住又は接近の法則に依て兩者は密接なる結合を形作るに至る。其結果快不快又は其の觀念が起れば直ちに其に適合した運動を起し、やがて感情と運動とが遂に堅き連鎖を作り一が他を支配し得るに至りて始めて意志能力が發生するのであると。卽ちベインは意志の發生を全く快不快の感情から說明した。そして快不快の感情の表象を動機とする行動のみを意志動作と考へた。然し吾々の意志は必ずしも動作となつて外部に現はれるとは限らないし、又た必ずしも快不快、利害得失のみを動機として發動するのではない。

所がベインは一方、有機體の自發的運動を以て感覺や感情以前に存在する最も原

本的な傾向であると考へ、意志は實に此の自發的傾向に其の源を發するものであると、した。此の點を以てすれば或は意的意志論の中に數へ入れることも出來るであらう。

ベインよりも更に極端に意志の情的側面を重視したのはヴントである。(五) ヴントは、感情と情緒と意志過程とが同一直線上にある順次的推移であると考へた。感情は此の直線の出發點であり意志は其の終點であつて情緒は此の兩極點の過渡段階をなせるものである。從て切言すれば意志は情緒の一種に過ぎない。意志過程は情緒の一種の弛緩形式に外ならぬ。

凡そ意志過程には緊張興奮の感覺や努力の感又は働きの感じを伴ふものであるが其は外面的の同伴現象に過ぎない、其は意志の徵候であつて決して其の原因乃至は條件ではない。所が他方に於て意志のみに特有なる內容的要素がある。其は卽ち動機である。然らば動機とは如何なる性質のものであるかと云ふと其は表象と感情との結合、所謂運動理由 Beweggrund と衝動彈力 Triedfeder とに還元される。けれどもヴントは此の兩者に同等の權力を與へながつた。意志動作の動機として決定的意味を有するのは特に感情的要素であると考へた。之に反して表象は單に間接

的に卽ち感情と結合した上で始めて動機としての意味を獲得するのである。だから感情は實に意志過程の完成的要素であるとした。

ヴントがかゝる極端なる情的意志說を說いたのは從來の心理學一般が感覺若くは表象の複合に依て全てを解決せむとする主知的方向に偏して居たが爲でもあらうが然しかゝる主知的方向が偏狹なるを脫れないとすればヴントの情的意志說も矢張り極端にをせたものと言はねばならぬ。意志過程の中でも衝動、本能の如きは感情的分子が殆ど絕對的の權力を持て居るが、有意運動から注意、注意から思惟となるに從て段々知的分子の世界となることは明かである。

然し乍らヴントの學說の重要なる缺陷は實は此處にあるのではない。彼は旣に述べた如く主意的一般方向の下に統覺心理學の體系を樹てた。それに其の體系に於て特別の地位を占め中心的の意味を持つべき意志の學說は單に表面的の說明に止まつて意志の根本的本質を捕ふるに至らなかつたのは見逃すべからざる而して堪ゆべからざる瑕瑾である。殊に單なる感情の經過形式の上から見れば意志過程は情緖と大差の認められない所から是を情緖の一種と見做すが如きは餘りに形式的な考方ではないか。

主意的心理學はもつと深く意志の本質を探らねばならない。無論意志は表象の系列や情緒の一形式であらう。然しそんな說明では意志本來の性質、意志の意志たる所以に就ては殆ど何物も得ることが出來ないであらう。

以上の知的及び情的意志論とは餘程趣を異にせるものはゼームスの說である。[六]彼は與へられた對象の thought が如何にして安定的に心を支配し得るに至るかを見るのが意志研究の中心とならねばならぬ。意志過程の中で最も意志的な作用は把持するに困難な對象をも離さずに是を心の中に確保する狀態である。かく爲すのが卽ち 'Fiat' である。言を換へれば意志的努力である。然し更に溯て是を考ふればかゝる意志的努力 'Fiat' も要するに意識其の物に固有なる自發性、衝動性の表現である。衝動性の表現から見れば感覺、表象、感情、情緒、意志は一つの階段的進行を形成して居る。其の頂點をなすものが意志である。意識其の物が元來衝動的のものである。かゝる意識の本質の代表的のものとして意志を考へたと云ふ點からゼームスの考を意的意志論に數へ得る。

エビングハウスも亦意志は衝動に發する。[七]意志は言はゞ豫想を以て爲される衝動である。して見ると意志作用は感覺及び感情が心的要素であると言ふのと同じ

意味に於て心的要素であると言ふことは出來ないであらうが、表象や感情が未だ抽象分解されない以前の包括的統一狀態であるから、矢張りある意味に於て心的要素である。感覺や感情を以て概念的要素なりとすれば是は發生的要素であると考へた。其他決定的傾向としての意志作用に獨異の性質を認めたものにアッハがある。(八)

吾々は以上、意志に對する主な心理學者の見解を見て來た。そして其の中で意志活動の知的又は情的半面のみを高調するものに對して特に精神の根本的性質として是を理解せむとするものを意的意志論としてゼームス、エビングハウス、及びアッハを擧げたのであるが彼等は更に此の見地から出發して一般の精神現象に對する組織的說明を企てようとはしなかつた。換言すれば心理學上の主意主義を主張するには至らなかつた。之に反してヴントは先に述べたように主意主義の下に統覺的心理學の體系を確立したのであるが其の意志に就ての態度には猶ほ此の方向の至らざるものあるを見出すのである。彼の情緒的意志說に依ては到底意志の本質を理解することは出來ない。而て其は心理學の一般的方向を意的方面に求めむとするヴントの體系に於ての痛切なる矛盾では無いか。

吾々は意志的心理學の焦點としての意志說を要求する。意志說の展開としての

主意的心理學を要求する。此の意味に於て意志說は心理學の序論であるとも言ひ得るであらう。又實際吾々が前に見て來たように意志に關する見解はやがて其の著者の心理學一般に對する態度を語るものであつた。

然らば意志の本質は何であるか。何を以て意志の本質を捕へんとするか。是れ蓋し容易な問題ではない。深い反省と細い思辨に依て精神生活の神秘を解かむとした哲學者は是に就ての興味ある卓見を示して居る。然し何處までも事實に卽して、經驗以前に溯ることを敢て爲ない心理學としての困難は一層である。

吾々は此の困難を冒して次のように是を解かむとする。其は一つの試みである。而も拙い試みである。事實を放れまいとするから自づから平凡に惰する。經驗以前に溯らないから自づから淺薄であるとの謗りを受けるかも知らぬ。然し其は致し方がない。其の平凡と淺薄は心理學の短所であると共に長所である。其の所謂平凡と淺薄とを通じて眞理を窺はむとする所に心理學者の惱みがある。

先づ最初に意志が他の意識內容一般と同樣に實體ではなくして過程であると云ふことを忘れてはならない。意志は決して吾々の精神生活の奧底に安座して之を支配し統一する能力ではない。其はあらゆる心的內容の起伏に伴て起伏し變轉に

應じて變轉する流れである。が然し其は單なる流れではない。其の瞬間に於ける意識內容の全統一の流れである。

一般に吾々の精神生活を見ると先づ感覺に始まりて遂には何等かの運動に終る所の過程が無限に複雜したものゝ反復であると見られる。而て外界又は內界の刺戟に依て起た感覺、表象其に伴ふ感情等は其後の運動に依て始めて何等かの解決を與へられる。其の結果が又新しい刺戟となつて入り來り、かくして此の關係は幾らでも繰返される。然し其の度每に身體的又は心的の運動が其の瞬間の一時的解決を與へて行き其に直接先だつ心的內容卽ち意志が感覺、感情等の他の內容を統括して居ることは明かである。かゝる心的內容の統一作用こそは最も本質的の意味に於ける意志である。單純なる衝動や反射運動に始まり有意、選擇運動より更に進んで注意、思惟等の內部意志動作に至る迄、苟くも意志作用の表現であると思はるゝものは簡單、複雜の差こそあれ必ず其の時に於ける種々の心的內容を統合して是に方向を與へて居る狀態、主觀が全體として働ける狀態であると言ひ得る。意識が統一的全體としての活動なりとすれば意志は實に其の統一の焦點に名けられたる狀態である。無論其は見方に依つては知的擇作用でもあらうし或は情緖の特殊の經過

でもあらう。が然し其等は以て吾々の意識生活に於て演じて居る意志の役目を十二分に現はせるものではない。意志には其等よりも、もつと切實な意味がある。意識生活其の物、否一般に有機體の生活又は生命と放すべからざる意味を持て居る。無論意志過程は感覺、表象を豫想して居り其等に對して生ずる主觀的の感情、情緒を重要なる動力とはして居るけれども其等の全てを包括し其等の示唆する意味を統合し有機體の生存といふことを基準として最後の解決を與ふる所に意志の本質はある。之を形式的に見れば感情の經過であり、之を內容的に見れば選擇決斷の作用ではあるが其は何れも半面の見方であつて全體としての意志の眞相を言ひ現はせるものではない。

由來意志は之を廣い意味に解すれば非常に大なる概念である。簡單なる反射運動や低級な衝動、本能に始まりて複雜なる思惟、想起、想像に至る迄、殆ど吾々の意識生活の大を部分蓋ふて居る。此の意味に於て、ヘフディングの言ふよふに意志は實に意識生活の最初にして最後である。かう云ふ多方面の樣々の現象の全てを其等の間に共通に見出さるゝ或一つの特質に依て之を包括的に說明し理解せむとすることは隨分困難な仕事である。而て若し此等の全ての現象に一貫する性質が見出され

たとするならば其は寧ろ意志の本質といふよりは意識其物の本質に近いかも知れぬ。其の結果、意志の特質と云ふものが漠然として捕へ所の無きものになるかも知れぬ。意志と意識乃至は生命とが殆ど同一のものとなるであらう。然し飜つて考へてみると、此等の三つは見方の廣狹、立場の相違から區別せられたのであつて本質的には元來同一のものである。其等は本質上結局一に歸すべきものである。してみると意志の本質をたづねて思はず意識其の物の本質の一端に觸れたとしても何の不思議があらう。

然し人或はもつと適確な端的な意志の特質が知り度いと言ふかも知れぬ。さうすれば吾々は其に答ふるに先だつて、その人に君の所謂意志なるものが外部動作に現はるゝものであるか、それとも內面的の意志であるか、或は兩者を包括する所の意志の本質の意味であるかを問はなければならない。若し彼の意味する所が二者の何れかであるならば其こそ吾々は明晰判明な說明を與ふることに依て彼を滿足せしむることが出來るであらう。普通意味されて居る所の固有の意志、有意動作に現はるゝ如き意志なるものは動機と名け得る意識內容に始つて働きの感じを伴ふ精神狀態であると定義される。是が最も一般的に考へられて居る意志過程である。

又若し彼が內部意志動作を意味するならば其は自己の活動の意識を伴ふ如き選擇決斷の作用であると言ひ得る。然し乍ら此等の說明は何れも言はゞ外面的の一應の說明であつて窮極的の理解ではない。若し其等の中の一つの說明に依て意志說の能事終れりとするならば其は哀むべき幸福者の夢に過ぎぬ。其よりも更に〈溯て意志の本質を意識生活の根柢にたづね意志的方向に基いて意識現象一般の解明を企てるのは實に主意的心理學の職分であらう。

(一) Külpe: Introduction to Philosophy. S. 180 ff.
Wundt: Kleine Schriften II. S. 159 ff.
(二) Münsterberg: Die Willenshandlung. S. 96.
(三) Meumann; Intelligenz und Wille. S. 190.
(四) Bain: The Emotions and the Will. S, 303 ff.
(五) Wundt; Grundriss der Psychologie.[12] S, 221—2.
Wundt; Grundzüge der Phy. Psy.[6] III. S. 278 ff.
(六) James; Principles of Psy. II. S. 561
(七) Ebbinghaus; Grundzüge der Psy.[2] I. S. 588.
(八) 本誌五六號參照